

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	京都大学	学長名	尾池和夫	拠点番号	J14	
1. 申請分野	F<医学系> G<数学、物理学、地球科学> H<機械、土木、建築、その他工学> I<社会科学> <u>J<学際、複合、新領域></u>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 ―漢字文化の全き継承と発展のために― (East Asian Center for Informatics in Humanities)					
研究分野及びキーワード	<研究分野:人文社会情報学>(漢字文化)(文字論)(データベース)(歴史情報システム)(知識ベース)					
3. 専攻等名	人文科学研究所、人間・環境学研究科共生文明学専攻、東南アジア研究所(平成16年4月東南アジア研究センターより改組)					
4. 事業推進担当者	高田時雄 計 14 名					
ふりがな<ローマ字> 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー)						
TAKATA TOKIO 高田 時雄(58)	人文科学研究所・教授	言語史・万国学 Ph.D. 京大博(文学)	計画全体の統括、東アジアの文字に関する人文情報学研究担当			
YAMASHITA TOSHI 濱下 武志(64) 平成18年3月31日辞退	東南アジア研究所・教授	東洋史・東大文修	漢字文献ナレッジベースの構築担当			
SAKASEGA KINYOSHI 金坂 清則(60) 平成18年4月1日追加	人間・環境学研究科 共生文明学専攻・教授	人文地理学・京大文修	漢字文献ナレッジベースの構築担当			
ATSUJI TETSUJI 阿辻 哲次(56)	人間・環境学研究科 共生文明学専攻・教授	漢字学・京大文修	東アジア人文情報学人材育成プログラム担当			
SAKASEGA JUNJI 若杉 準治(58)	人間・環境学研究科 共生文明学専攻・教授	文化財学・京大文学士	東アジア人文情報学人材育成プログラム担当			
MIZUNO NAOKI 水野 直樹(56)	人文科学研究所・教授	東アジア関係史・京大文博	東アジア人文情報学人材育成プログラム担当			
TOHUYA TATSU 富谷 至(56)	人文科学研究所・教授	中国制度史・京大博(文学)	漢字文献ナレッジベースの構築担当			
IKAWA RYUICHI 井波 陵一(55)	人文科学研究所附属漢字情報研究センター・教授	中国学術史・京大文修	漢字文献ナレッジベースの構築担当			
TAKEDA TOKIMASA 武田 時昌(53)	人文科学研究所附属漢字情報研究センター・教授	漢字情報論・京大文修	東アジア人文情報学人材育成プログラム担当			
OKAMURA HISOSHI 岡村 秀典(51)	人文科学研究所・教授	中国考古学・京大文修	東アジアの文字に関する人文情報学的研究担当			
HITTERN CHRISTIAN ウィッテルン・クリスティアン(45)	人文科学研究所附属漢字情報研究センター・准教授	マケガ 理論・ゲググ'大Ph.D	漢字文献ナレッジベースの構築担当			
ISHIKAWA YOSHIO 石川 禎 浩(44)	人文科学研究所・准教授	中国近代史・京大博(文学)	東アジア人文情報学人材育成プログラム担当			
YASUOKA KOICHI 安岡 孝一(43)	人文科学研究所附属漢字情報研究センター・准教授	文字コード論・京大博(工学)	東アジアの文字に関する人文情報学的研究担当			
MORIYAMA TOSHIKO 守岡 知彦(38)	人文科学研究所附属漢字情報研究センター・助教	漢字情報学・北陸先端院大博士 (情報科学)	東アジアの文字に関する人文情報学的研究担当			
5. 交付経費(単位:千円) 千円未満は切り捨てる () : 間接経費						
年 度(平成)	1 5	1 6	1 7	1 8	1 9	合 計
交付金額(千円)	76,000	65,400	66,300	62,230 (6,223)	61,000 (6,100)	330,930

6. 拠点形成の目的

本研究拠点の目指すものは純然たる情報科学ではなく、もちろん従来の人文科学や社会科学でもない。それは新しい学際領域としての東アジア人文情報学である。中国や日本をはじめとする東アジア諸国は長期にわたり漢字を媒体として、豊かな文化を育んできたが、そのような伝統文化を体現する東アジア人文学は21世紀の情報化社会において極めて大きなチャレンジを受けていると言える。これまでのコンピュータ・サイエンスでは、漢字にやさしい環境作りが十分でなかったこともあるが、一方で主として漢字を用いる学問分野が新しい環境にみずからを適応させるべき努力を怠ってきた面も否定できない。しかし新しい情報化された世界で十全に伝統を保持し、新たな発展を目指すためには、東アジア人文学を情報学によって新たに再編することが不可欠であり、そのための方法と理論の確立が要請されている。

本拠点形成計画では、漢字の研究を柱にしつつ、情報学的手法によって漢字文化圏における、あるいは漢字文化圏に関する人文学研究の再編成を目的とする。漢字の情報化という面では、テキストをコード化しデータベースに仕上げるだけで事足りりとする考え方が横行していた印象を受けるが、本拠点の目指すところはむしろデジタル化によって失われる部分も含めたトータルな漢字文献の保持再生であり、煎じ詰めれば漢字文化の全き継承発展である。

そのためには、第一に漢字を中心とする東アジア諸言語の構造の体系的研究や多字化・多言語化・国際化などの情報化技術等、実質的な意味で漢字を情報化するための研究が必要となる。漢字および漢字文献の情報化はローマン・アルファベットのそれに比べていちじるしく立ち後れており、漢字と情報に関する諸問題の解決は、すべての漢字を用いる学問分野において緊急性が高いからである。三千年にわたって蓄積されてきた漢字文献はそれぞれの時代の歴史の反映であり、変遷する複雑な制度に対する十全な理解を前提にしなければ、その内容を正しく構造化し後世に受け渡すことができない。したがって情報化されるべき漢字文化、東アジア世界の文化に関する深い理解と洞察が

必要であり、その記述のあり方についての研究も従来以上に進展させねばならない。東洋学研究の長い歴史と伝統の中で培われた知の蓄積を有する京都大学に設置される本拠点は、世界に先がけて、新たなインターフェースをもって漢字文化情報を発信するに相応しい場所といえよう。

このようにして発信される漢字文化情報は京都をして新たな漢字文化研究の世界的中心地たらしめるポテンシャルを持ち、東アジアおよび欧米世界から漢字情報学を指向する学生・若手研究者を集める力となる。漢字から出発して広く東アジアの文字言語に対する理解を有し、将来の研究を主体的に担う人材を育成しつつ、また彼らとともに研究を推進することによって、東アジア世界に関する人文学研究は東アジア人文情報学研究として新たに生まれ変わることになる。

グローバル化が確実に進行している今日においても、東アジア世界という地域的まとまりは厳然として存在するし、国際社会に占めるその重要性は今後一層高まることが予想される。東アジア世界の独自性を支えるものの根幹に漢字文化があることは衆目の一致するところであり、日本文化の立脚点もまずここに見いだされるべきであろう。21世紀において日本が学術の世界で国際的展望を見いだそうとするなら、東アジア世界にこそ最大限の注意を払う必要がある。

ひるがえって現代社会における最も基本的な条件である情報化という面において、漢字を共通のコミュニケーション媒体とした東アジア世界が、漢字という文字体系の独自性を主張し、グローバル・スタンダードの中に組み込んでいくためには、漢字を使用する社会が本質的な部分で本当に情報化と共存し、そこで大きな貢献をなしえるのかが問われて然るべきである。もしそれが可能だとすれば、如何にして実現し得るか、という問題に対する正面からの取り組みが求められる。新しい学際領域としての東アジア人文情報学の構築はそのために必要な第一歩であると言える。そしてこのような展望に立つとき、ほかでもなく我が国においてその第一歩が踏み出されることの意義は極めて大きい。

7. 研究実施計画

本計画は、有機的連関性をもつ三つのプログラムから構成されるが、その内の教育プログラムについては別項にゆずり、ここでは二つの研究計画に関して記述する。

一 東アジアの文字に関する人文情報学的研究

東アジア世界とは端的に言えば漢字文化圏ということになるが、この地域では漢字以外にも、漢字から派生したり、漢字と密接な関係を有する諸種の文字が生起し、また今日でも用いられている。それら諸種の文字を扱うための人文的・情報学的研究をおこなうと同時に、それらに関する知識と技術の教育をおこなう。

すなわち、漢字そのものに関する多方面にわたる情報学的研究はもとより、漢字情報学において蓄積された知見および技術を援用し、カナ・ハングル・クオックゲーなど漢字と深い歴史的関係を有する周辺の表音文字、さらには西夏文字などの古代擬似漢字を含めた、東アジア世界の文字を総体的に扱う知識体系を構築する。

その際に留意しなければならないのは、文書やテキストの载体・形式も知識体系の重要な要素だという点である。こういった視点は今日のデータ処理には欠落している部分であり、文化の十全な継承のためには欠かすことができない。またこの種の情報の正確な伝承は、公証性をもつ文書、個人の証明、契約という社会制度、法律・経済活動のあり方にかかわる今日的な課題でもある。

さらに上記の知識体系は、必ずしも構造化されよく整理された形で存在しているわけではないので、これらを情報化の視点から見直し、東アジア世界のさまざまな文献情報のデジタル化に資する。

そのためには、東アジア世界の文字に関する知識体系を研究し、多字化（マルチスクリプト化）・多言語化・国際化といった情報化技術を発展させる必要がある。これらは日々変化・発展しつつあるものなので、学内外の協力を得つつ最新の知識と技術を有する専門家を養成する必要がある。

二 漢字文献ナリッジベースの構築

漢字文献研究の重層化・高度化に欠かせない漢字文献ナリッジベースを構築し、そのための基礎研究を行う。それぞれの漢字文献は生産された時代の複雑な社会と制度を前提とするため、これらの文献の内容を正しく情報化し、ナリッジベースを構築するためには、在来の文献学的研究で得られた成果を大幅に利用することが不可欠であり、そのためには長い期間にわたって蓄積されてきた歴大な知識をどのように構造化し、情報として利用し得るかたちに整理するかが課題となる。かくして単一の専門用語から出発して、あらゆる関連情報にアクセスが可能となるような知識庫が実現できれば、21世紀東アジア情報社会における「知の宝庫」建設への道が開かれるであろう。そのためには

(1)歴代の漢字文献をマークアップ技術により電子テキスト化し、

(2)それらの文献に関するメタデータ(書誌情報)を集積、知識の構造化を行い、

(3)これらの全情報を有機的に統合し、より高度なデジタル化を行う

という手続きが必要となる。従来の研究によって蓄積された、そして今後の研究によって得られるであろう東アジア世界・漢字文化圏に関わる知識と情報はこのナリッジベースの基礎となり、そこに十全に包含されることとなる。

漢字文献ナリッジベースの構築は、漢字文献研究に関する伝統的な知識と最先端のデジタル化技術の融合の中で、21世紀における新しい東アジア学のあり方、漢字文化の記述の方法を追求する試みであるとともに、その発展は漢字文化の中で生活する人々の諸活動にとって大きな波及効果をもつ成果となるはずである。

ただ歴大な中国文献のすべてにわたるナリッジベースの構築は不可能であるため、あらゆる意味でわが国文化のバックボーンを形作っている唐代を取り上げ試行的な研究を行うこととする。幸い人文科学研究所はかつて平岡武夫教授を中心に大部な『唐代研究のしおり』を出版した経験があり、その遺産を利用することができる。

8. 教育実施計画

本計画においては人文学と情報学を横断する教育の場を作り上げ、漢字文化の全般的ボトムアップを図る。それぞれの事業推進担当者は京都大学大学院人間・環境学研究科、および同文学研究科で東アジア諸学に関する教育を行うだけでなく、京都大学学術情報メディアセンター多言語情報研究委員会主催の「東洋学へのコンピュータ利用」セミナーを、多年にわたり実施してきた。これらの実績をふまえ、さらに全学的な取り組みに留意して、(1)関係する既設研究科(主に人間・環境学研究科、文学研究科)の博士課程学生にたいして、東アジア人文情報学の高度専門カリキュラムを開発、実施すると同時に、(2)東アジア人文情報学拠点において、人文学・情報学双方に通じた人材育成を目的とする専門教育を実施し、(3)さらに、漢字文化を基層とする諸国(主として東アジア)からの留学生を積極的に受け入れ、近似的ながらも差異を持つ東アジア各国の漢字情報システムに関して、その統合的理解をうながす教育を実施し、世界文化における漢字文化の継承と発展を支えるような人材を育成する。

欧米型の言語と思考を基盤として発展してきたコンピュータ科学をそのまま東アジアに適用するだけでは大きな支障があり、時としては甚大な文化的損失すら予想される。したがって東アジア人文情報学の教育においては、漢字文化圏に特有な問題を十分に認識させ、独自のカリキュラムを策定することが求められる。

教育すべき対象は、

- (1) 博士課程学生(人間・環境学研究科、文学研究科等の在籍者)とポスト・ドクター
- (2) 外国、とくに東アジアからの留学生
- (3) 図書館司書、博物館学芸員、情報処理技術者等の専門職を目指す者の三者となる。

教育内容は以下の2種に大別できる。

(a) 東アジア言語の構造をふまえたデジタル化に関する教育

- 1. 東アジアの諸言語(日本語・中国語・韓国語・ベトナム語等)について、その音韻組織、

および、文字との関係をデジタル化に即して教育する。

2. 東アジアにおける文字使用、および文字情報のデジタル処理の実態を調査・実習する。

3. 東アジア諸言語および文字を実際にコンピュータ処理するための技術について教育する。

(b) 東アジア文献のデータベース化に関する教育

1. 東アジア文献の目録学及び工具書に関する基礎知識を教育する。分類整理法については、京都大学人文科学研究所漢字情報研究センターがこれまで実施してきた漢籍担当職員講習会のノウハウを生かし、その所蔵図書を用いて実習を行う。

2. 東アジア文献の電子テキスト作成に不可欠なマークアップ技法の基礎知識を講習し、コンピュータでの実習を行う。

3. 東アジア文献のデータベース作成からナリッジベースへの質的転換にかんする理解を徹底させ、それを十全に活用するための情報学的基礎知識を教育する。

4. データベース作成を積極的に推進する国際研究機関において実地調査或いは研修を行う。

上記教育プログラムの参加者には、このほかに東アジア人文情報学研究会や人文科学研究所の共同研究班に参加させ、そこでさらに高度な実践的指導を行いつつ、共同研究会での資料のデータベース作成や研究情報発信の担い手として育成することになる。すべての教育プログラム参加者に、毎年の研究成果を学会において口頭発表させることはもちろん、あわせてその論文を学術誌に積極的に投稿させ、さらには、情報発信能力の練磨を目的として、東アジア人文情報学拠点のホームページで自己の研究成果を公開させる。

9. 研究教育拠点形成活動実績

目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

東アジア人文学を情報技術により再編することで、本拠点を世界的な情報発信基地とすること、そのための基礎研究として東アジアの文字に関する人文情報学的研究を進め、漢字文献のナリッジベースの研究を行うこと、さらに東アジア人文情報学の将来を担うべき研究者を養成することが本計画の主な内容であった。研究面においてはその目的は概ね達成できたと考えている。教育の側面では、人文学研究者のコンピュータ・リテラシーの増進にはセミナーなど本プログラムの各種取り組みが奏効したと考えているが、一個の独立した学としての東アジア人文情報学の確立に関しては、継続して努力していくことで、今後の展開を注意深く見極める必要があると考える。

古代の漢字文献を扱う学問分野では、JIS漢字ではもちろん不足だし、しばしばUnicodeにすらない文字を使うことが必要となる。したがってコード体系にしばられることのないCHISEプログラムの提唱と開発は、この分野における本プログラムの突出した貢献であったといえる。文字コード以外にも、音や訓などの読み、さらに形や部品などさまざまな漢字の属性を利用することで、コードの呪縛から漢字を解放し、無限の文字の世界に至る道を示したことは特筆すべき成果である。CHISEにはグリフの作成機能も備わっており、どんな漢字でも作成可能となっている。また本プログラムではCHISEとは別に、人名用漢字の策定にかかわり、新人名用漢字983字のフォントをネット上で公開した。これらは東アジアの漢字を用いるすべての学問分野におけるコンピュータ利用に大きな貢献をなし得たものと信じる。

古代の漢字の標本を時代ごとに通覧し、その変遷や異体字の相互関係をビジュアルに把握するためには、拓本文字データベースの開発は極めて有用である。近年、石刻文献の一次資料としての重要性が国際的な規模で再認識されつつあることもあり、このデータベースに対する反響はきわめて大きい。石刻文献のデータ化をめぐる2006年12月に開催した国際ワーク

ショップでは、中国やヨーロッパからも類似の計画に関する報告があったが、このデータベースの達成度に対して大きな賛辞が寄せられた。このデータベースは、本プログラムで開発された独自のツールを用いて作成されたデータを基礎とし、現在2,800件の拓本に出現する文字が検索可能で、世界中から月間10万件を越すアクセスがある。また代表的な1,000文字だけを切り出して書物にした『石刻千字文』全3冊は、一次資料に基づく異体字辞書として使用可能なものであるが、やはり成果の一つとして出版された。甲骨文字に特化した人文科学研究所所蔵甲骨文字のデータベースも公開されているが、本プログラムと密接に関連するデータベースとしては70万レコードを超える世界最大の全国漢籍データベースが注目に値するものである。

漢字文献ナリッジベースの試行研究として唐代ナリッジベースが作成された。このナリッジベースを構成するいくつかのデータベースのうち、唐代人物データベースがまず他に先駆けて公開され、次いで官職データベース、地理データベースがリリースされた。これらのデータベースを統合したものが唐代ナリッジベースである。これら個々のデータベースの構築には、中間段階で「唐代のしおり」長編カード・データベースの作成が行われたほか、メタデータの研究と設計にはとりわけ大きな努力が払われた。メタデータの研究はまさに人文学と情報学の接点であり、その試行錯誤の過程で得られた知見は今後の研究に大きな資産となるはずである。それらの一部はCOE研究員による研究成果として公表されている。

上記の成果をうけ、平成19年12月に国内2名、国外2名の委員による外部評価を実施した。ある委員は本プログラムの特徴を、(1) 細心な資料収集、(2) 斬新な研究方法、(3) 国際交流と連携の促進、(4) 豊富な成果の4点にまとめ、それぞれ高く評価していただいた。とくに唐代人物知識ベース、拓本文字データベース、全国漢籍データベースなどは、専門性の高い、しかも使いやすいデータベースモデルであるという評価を得た。また別の委員からは同じくデータベースに関して幾つかの専門的な要望も出されたが、おおむね好意的なもので、且つ

技術的な改良により対応できるものであった。CHISEに代表される漢字の属性に基づいた、コンピュータによる新しい漢字処理の試みの先進性には一致して強い関心が寄せられたほか、唐代ナリッジベースの設計が斬新であるという評価を得た。また外国でシンポジウムを開催したことなどについて、国際的な取り組みに対する評価があったほか、一委員からは中国と交流する際に、国際標準の面でどのような協力体制を築き得るかについて、さらなる研究が必要だという意見も披歴されたのは、たしかに今後の課題の一つである。ほとんどの委員の見解として一致して表明されたのは、各種データベースを引き続き拡充・発展させて欲しいという見解であった。またこれらの事業を継続していくことはCOEの拠点形成以後の責任として重要だという指摘もあった。外部機関との連携および広報の必要性も考慮すべきであり、またこの分野における国際的な拠点として、ポータル・サイト的な機能も充実させるべきであるという強い意見が、一委員から出された。これまでのサイトの構成は拠点そのものの事業に局限されていた嫌いがあったが、今後は漢字情報研究センターのサイトと連携するかたちで、こういった機能を充実させて行きたい。

標準化への寄与として、事業推進担当者はこれまでJISなどISOや、TEIの策定に関与してきた経緯があるが、本プロジェクトを通じてこれらの国際規格に貢献することができた。外部評価においても、本プログラムがUnicode及びTEIの規格を採用したことは成功であったとされているが、なによりもCHISEの漢字分解法がISOに採用されたことは特筆して良い。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

毎年夏期休暇中に人文情報学セミナーを開催し、東アジアの文献を取り扱う技術に特化した情報学的訓練を実施したことで、大学院生の情報学的技法のスキルアップが達成された。またほぼ月一回のペースで人文情報学研究会の例会をもち、大学院生に研究発表の機会を与えたが、その成果は『漢字文化研究年報』に収録されている。

短期ではあるが大学院生など若手研究者を拠点リーダーの引率のもとに台湾歴史語言研

究所において実習させたことは、この分野における東アジア規模の交流と情報交換に大いに役立ったはずである。

さらに平成18年度以降、人間・環境学研究科において人文情報学の正規授業を開始したことで、専門的な人材の育成を目指した。しかし現時点ではなお二年間しか経過していないため、その具体的な成果はなお未知数であり、今後の継続課題である。

3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

上にも触れたCHISEプロジェクトはコード体系に依存しないでコンピュータ上で漢字の入力や検索が可能となる斬新な試みであり、それを提案した守岡論文は情報処理学会山下研究記念賞を受賞した。またCHISEで用いられた字形分解法はISOにも採用され国際的な認知を受けている。今後、CHISEをさらに発展させることによって、古文字や少数民族の文字などへの応用が期待される。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

事業推進担当者はほぼ月一回のペースでワーキング会議を開催し、事業の進行の円滑化を図った。また三つの実行班それぞれも定期的にミーティングを行い、進行の調整を行った。とりわけナリッジベース班はCOE研究員や技術補佐員など、実際に事業を担当しているスタッフを含めたミーティングによってテキストのマーキングにおける問題点や、メタデータの設計にかかわる意見交換を行ったことが有効に作用した。ナリッジベース班のミーティングから生まれた成果の一部は論文のかたちで学術誌に発表されている。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

中国学においてこれまで京都大学が果たしてきた貢献は非常に大きいものがあり、情報化という面でも漢字情報研究センター(旧東洋学文献センター)を通じて世界に先駆けた試みを行ってきたが、今回の21世紀COEプログラムの展開によって、漢字デジタル化における新たな技術が提案されたこと、いくつかの先進的なデータベースの公開されたことによって国際的

な拠点としての存在感を示すことができた。また本プログラムの実施にともなって外国からの留学生やポスドクなどの受入数が増加した。

6)国内外に向けた情報発信

HP上での成果発信や、ニューズレターの定期刊行、国際シンポジウム・ワークショップの開催などを通じて、積極的な情報発信につとめた。とりわけ中国（2005年北京；2006年南京）でシンポジウムを開催（2回）したことは、国際的な認知を得る点ではきわめて効果的であった。また個々の事業推進担当者やCOE研究員はしばしば国内外の学術会議等で成果を発表した。

7)拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

学内で適当なスペースを確保することができなかったことから、拠点スペースを賃借することになったため、その関連経費（スペース賃借料及び光熱水費）に一定の支出を余儀なくされたことが些か特殊な使途であったかも知れない。それ以外は事業推進に欠かせない人員を雇用するための人件費、事業推進担当者等の研究旅費、シンポジウム開催などで発生する各種経費及び研究者の招聘旅費、成果報告書やニューズレター、ポスターなどの印刷費、研究資料や機器類（備品或いは消耗品）などが経費の主たる使途であり、ほぼバランスがとれた配分であると考えられる。

今後の展望

この拠点形成の中核を担った人文科学研究所附属漢字情報研究センターは、今後さらなる改組による体力の増強によって、日本における漢字関連の共同研究の拠点として、中国のみならず東アジア全域の人文情報をカバーできるように発展させたいと考えている。また該センターの提供する重要なデータベースである全国漢籍データベース、東洋学文献類目データベース、拓本文字データベース、唐代ナリッジデータベースなどは十全なメンテナンスを行うことでさらに利便性の高いものにしていきたい。

平成20年4月に発足した京都大学デジタル・アーカイブに対して、すでに技術支援とコンテンツの充実の面で大きな役割を果たしている

が、今後この方面でも継続して連携を図っていく予定である。

その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

東アジア人文諸学は古い伝統と長い歴史を有する学問分野であることは誰しも認めるところである。しかしコンピュータの登場と文献のデジタル化という巨大な潮流の中で、学問の方法や内容が大きな変容を余儀なくされている。本拠点形成のさまざまな取り組みや成果の発信を通じて、情報学的技法が東アジア人文学に如何なる影響を及ぼし得るかについて一定程度の認識が得られたはずである。また漢字文化が世界史的なチャレンジを受けていることは事実であり、漢字文化圏の諸国がみずからの文化を継承発展させていくために、情報化の側面で大きな努力を払わねばならないであろうことがいよいよ明白となった。さらにこれからの東アジア人文学はどうあるべきかを真剣に考える端緒ともなったと考える。

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	京都大学	拠点番号	J14
拠点のプログラム名称	東アジア世界の人文情報学研究教育拠点—漢字文化の全き継承と発展のために—		
1. 研究活動実績			
①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの ※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入 波下線（<u> </u>）：拠点からコピーが提出されている論文 下線（<u> </u>）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生			
高田時雄『敦煌・民族・語言』，北京，中華書局，495p. 2005.12			
高田時雄・劉進寶『轉型期的敦煌學』（共編著），上海古籍出版社，2+1+3+671p. 2007.11			
高田時雄「莫高窟北區石窟發現《排字韻》節記」，《敦煌學》第二十五輯（潘重規先生逝世週年紀年專輯），2004.09, 303-310			
高田時雄「非漢字から見た漢字文化」『月刊言語』第36巻第10號，48-55 2007.10			
TAKATA Tokio, "The Chinese Language in Turfan with a Special Focus on the <i>Qieyun</i> Fragments", <i>Turfan Revisited — The First Century of Research into the Arts and Culture of the Silk Road</i> , Dietrich Reimer Verlag (Berlin), 333-340, 2004			
濱下武志「全球化中の東亞地縁文化——“日本與亞洲”和“亞洲中の日本”的自他認識的異同」，中国社会科学研究會編『中国與日本的他者認識-中日学者の共同探討』（東瀛求索2003年巻）32-67, 2003			
濱下武志「華以外華人研究之回顧與展望」『時代變局與海外華人的族國認同』（中華民國海外華人研究學會叢書系列9），中華民國海外華人研究學會，3-12, 2005			
濱下武志「華僑・華人史研究をめぐる東南アジアと東アジアの連続と断絶」『東南アジア研究』43巻4号，14-27, 2006			
阿辻哲次『漢字のはなし』岩波書店，181p., 2003			
阿辻哲次『漢字三昧』光文社，229p., 2003			
阿辻哲次『部首のはなし』中央公論社，201p., 2004			
阿辻哲次『部首のはなし〈2〉』中央公論社，201p., 2006			
阿辻哲次『漢字の文化史』筑摩書房，255p., 2007			
金坂清則「辻子地名」吉田金彦・金坂清則ほか（京都地名研究会）編『京都の地名 検証2』勉誠出版，157-169, 2007			
金坂清則「突抜地名」吉田金彦・金坂清則ほか（京都地名研究会）編『京都の地名 検証2』勉誠出版，195-205, 2007			
金坂清則「京都地名研究の新天地を求めて」『地名探究』5, 19-41, 2007			
金坂清則「マラッカで見た『漢字文化の継承と発展』の一齣」『漢字と文化』11, 1-15, 2007			
水野直樹「日韓歴史資料の共有化を一歴史認識における「和解」のために」『世界』第741号，116-123, 2005			
水野直樹「同化と差異化—日本の植民地支配と“創氏改名”」韓国学の世界化事業団・延世大学校国学研究院編『日帝植民地時期を読み直す』図書出版ヘアン（ソウル），69-82, 2007			
水野直樹「植民地期朝鮮の日本語新聞」『歴史問題研究』（ソウル）第18号，253-266, 2007（朝鮮文）			
水野直樹『創氏改名—日本の朝鮮支配の中で』，246p., 2008			
富谷至「漢代の「伝」について」『シルクロード学研究』22, 63-82, 2005			
富谷至「江陵張家山247号墓出土竹簡——とくに「二年律令」に関して」『木簡研究』27, 235-249, 2006			
富谷至『江陵張家山二四七号墓漢律令の研究』朋友書店，2冊，2006			
富谷至「近年出土した中国古代の法律」『古代文字史料の中心性と周縁性』春風社，187-198, 2006			
富谷至「剥奪生命與處理屍體的刑罰」中国政法大学『中国古代法律文献研究』第3輯，125-152, 2007			
井波陵一『知の座標——中国目録学』白帝社，228p. 2003			
井波陵一『漢籍目録を読む』京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター，152p., 2004			
井波陵一『魏晉石刻資料選注』（編）京都大学人文科学研究所，292p. 2005			
井波陵一『京都大学人文科学研究所漢籍分類一覽』京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター，123p., 2005			
井波陵一『京大人文研蔵書印譜（一）』（編）京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター，94p., 2008			
武田時昌「王充の性命論と科学知識」『坂出祥伸先生退休記念論集 中国思想における身体・自然・信仰』東方書店，169-189, 2004			
武田時昌「江戸の珠算文化とその情報源」『Chubu Institute for Advanced Studies Forum Series』33, 2-29, 2005			
武田時昌「精誠の哲学」『中国学の十字路 加地伸行博士古稀記念論集』研文出版，84-99, 2006			
武田時昌「中国における自然哲学の理論構造」『三島海運記念財団研究報告書』44, 97-101, 2007			
TAKEDA Tokimasa, "The Formation of the Study of <i>shushu</i> 術数 and its Development in the Middle Ages: A Tentative Study of a Field of Scientific Study Peculiar to East Asia, <i>HISTORIA SCIENTIARUM</i> , Vol.17-3, 161-174, 2008			
岡村秀典『中国古代王権と祭祀』学生社，498p., 2005			
岡村秀典『雲岡石窟』遺物篇，朋友書店，184p.+ 図版30p., 2006			
岡村秀典「中国古代の農耕儀礼と王権」『東洋史研究』第65巻第3号，72-81, 2006			
岡村秀典「幻の「夏」王朝の発見」『アジア遊学96 資料に見る最新中国史』4-14, 2007			
OKAMURA Hidenori, "Art and Archaeology of the Western Regions and Han China, Opening up the Silk Road", <i>The Han and the Eurasian World</i> (Record No.8 on The Silk Roads-Nara International Symposium), 103-107, 2007			
Christian WITTERN, "Writing Systems and Character Representation", in: <i>Electronic Textual Editing</i> , 291-298, 2006.			
Christian WITTERN, "Entrance Through the Scriptures: Catalogues and Electronic Text as a New Gate to the Buddhist Tradition", 中華佛學學報, Vol.20, 413-429, 2007			

- Christian WITTERN, "Patterns of Variation: The Textual Sources of the Chinese Buddhist Canon as Seen through the CBETA Edition", in: *Essays on East Asian Religion and Culture*, 209-232, 2007
- Christian WITTERN, "Digital Text, Meaning and the World: Preliminary considerations for a Knowledgebase of Oriental Studies", 東アジアにおける儀礼と刑罰, 41-58, 2007
- Christian WITTERN, "Improving Findability: Faceted Search with Lucene, Solr and VUFind", 東洋学へのコンピュータ利用, 第19回研究セミナー, 85-101, 2008
- ISHIKAWA Yoshihiro, "Liang Qichao, the Field of Geography in Meiji Japan and Geographical Determinism", in: Fogel, Joshua (ed.), *The Role of Japan in Liang Qichao's Introduction of Modern Western Civilization to China* (China Research Monographs, No.57), Berkeley: Institute of East Asian Studies, University of California, 156-176, 2004
- 石川禎浩「通史と歴史像」飯島渉・田中比呂志編『21世紀の中国近現代史研究を求めて』研文出版, 85-101, 2006
- 石川禎浩「李大釗早期思想中の日本因素：以茅原華山為例」〔中国語〕『社会科学研究』〔成都〕141-149, 2007
- 石川禎浩「近代中国的“文明”與“文化”」『日本東方学』第1集, 中華書局, 322-337, 2007
- 安岡孝一「『縁』モデルにもとづく拓本文字データベース」『東洋学へのコンピュータ利用, 第16回研究セミナー』3-12, 2005
- 安岡孝一「QWERTY配列再考」『情報管理』Vol.48, No.2, 115-118, 2005
- 安岡孝一「Adobe-Japan1-6とUnicode——異体字処理と文字コードの現実」『情報管理』Vol.48, No.8, 487-495, 2005
- 安岡孝一・安岡素子『文字符号の歴史 欧米と日本編』共立出版, 286p., 2006
- 安岡孝一, 安岡素子『キーボード配列 QWERTYの謎』NTT出版, 211p., 2008
- 守岡知彦・江渡浩一郎・苜米地等流・宮崎泉・師茂樹「CHISE Project」『漢字文献情報処理研究』第4号, 58-69, 2003
- 守岡 知彦・師茂樹「文字素性に基づく文字処理」『情処研報』Vol.2004, No.58, 53~60, 2004
- 守岡知彦「漢字処理」『中国21』Vol.23, 163-178, 2005
- 守岡知彦「文字オントロジーに基づく文字処理について」『情処研報』Vol.2006, No.112, 25-32, 2006
- 守岡 知彦「CHISE に基づく甲骨文字資料の電子化について」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 デジタルアーカイブ—デジタルアーカイブと時空間の視点—』(情報処理学会シンポジウムシリーズ) Vol.2007, No.15, 115~122, 2007

②国際会議等の開催状況【公表】

（事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数（うち外国人参加者数）、主な招待講演者（3名程度））

・ 2003年11月28日から29日 京都市国際交流会館

「書体・組版ワークショップ」Glyph and Typesetting Workshop 100名（20名）

John Plaice (The University of New South Wales), Yannis Haralambous (Ecole Nationale Supérieure des Telecommunications de Bretagne), Tom Bishop (Wenlin Institute, Inc.)

・ 2004年11月18日～21日 京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール

「中國宗教文獻研究國際シンポジウム」200名（50名）

Jean-Noel Robert（フランス高等研究院教授）、Antonino Forte（ナポリ東洋大学教授）、榮新江（北京大学教授）

・ 2005年1月22日 中国北京湖北大廈

「日中共同シンポジウム：漢字文獻資料庫の新技術」 80名（70名）

孫一鋼（中国国家図書館科研處處長）、孫衛（数字図書館管理处総工程師）、牛振東（中国数字図書館有限責任公司技術總監）

・ 2006年1月15日 京大会館

「華人世界と漢字文化」 50名（10名）

陳志明（香港中文大学教授）、朱崇科（中国中山大学副教授）

・ 2006年5月17日 京都大学百周年時計台記念国際交流ホール

「国際セミナー TEI Day in Kyoto 2006」 100名（20名）

Matthew Zimmerman (Chair, TEI Consortium), Syd Bauman (Brown University), Lou Burnard (Oxford University)

・ 2006年9月8日～10日 中国南京師範大学

「典型期的敦煌學——繼承與發展」國際學術研討會 300名（280名）

Victor Mair (University of Pennsylvania), Peter Zieme (Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften), Irina Popova (Institute of Oriental Studies, Russian Academy of Sciences)

・ 2006年12月11日～12日 京大会館

「中國石刻文獻研究國際ワークショップ」 60名（20名）

趙超（中国社会科学院考古研究所）、Lothar Ledderose (Heidelberg University), Kuo Liying (Ecole Française d' Extrême-Orient)

・ 2007年6月1日、3日 東京国際仏教学大学院大学及び京大会館

「日台共同ワークショップ：佛教文獻と文學」 50名（20名）

鄭阿財（南華大學教授）、蔡榮婷（中正大學教授）、梁麗玲（銘傳大學副教授）

・ 2007年12月10日～12日 京都大学国際交流ホール

「漢字文化三千年」國際シンポジウム 150名（30名）

Christoph Harbsmeier (Oslo University), 王三慶（成功大學教授）、陳先行（上海図書館副館長）

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

教育に関する活動は、東アジア人文情報学人材育成プログラムとして、以下のことを行った。

1 博士課程学生に対する人文情報学の授業

平成15・16年度を通じてカリキュラムの策定を行ってきたが、人間・環境学研究科が改組後5年を経過し、カリキュラム変更が可能となったので、18年度から同研究科における正規授業としての「人文情報学」、「東アジア人文情報学」を開始した。その概要は以下の通りである。

・人文情報学（安岡担当）：コンピュータ通信において用いられる文字コードについて、日本だけでなく欧米やアジアなど世界の文字コードについて講義する。文字コードの技術的側面のみならず、文字コードの成立過程など歴史的・社会的側面に重点をおいて、演習形式を採用する。

・東アジア人文情報学（Wittern担当）：

今日人文学の諸分野においても不可欠となったコンピュータ使用において、特に東アジア諸国の文献を対象に、その文献にふさわしいモデルを考慮した上で、基本的な記述方法（XML等）を学ぶ。また「各種のモデリングから研究目的に応じてどのように新たな発見に結び付けるか」というテーマを設定し、人文情報学の問題設定と基本的な方法論を学ぶ。

2 東アジア人文情報学セミナーの開催

平成16年度以来、毎年夏休みの期間中を利用して集中的に情報学的なスキルアップを図るために、実習に重点を置いたセミナーを開催した。受講者は実習指導の関係で、毎年約10名に絞り、人間・環境学研究科の大学院生を中心に、学内外からも希望者をつのる公募方式を採用し、選考委員会による書類審査で決定した。そこで使用される教材テキストも刊行されている。<http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/papers/summerseminar-2004/>

3 東アジア人文情報学研究会

上記1, 2の受講者を含む人間・環境学研究科の大学院生及びCOE事業推進者を中心とする指導教員を構成員として立ち上げた研究組織である。東アジア人文学の研究に従事する学生間の研究情報交換の場を提供し、研究の向上を目的とし、平成17年度からスタートした。運営の主体となる大学院生は約20名であり、毎月一回、月例研究会を開催した。その研究成果を『漢字文化研究年報』としてまとめ、3冊を公刊した。

4 外国における実習

平成17年1月、拠点リーダーの引率のもと、サマーセミナー受講生二名（ともに中国からの留学生、うち一名は当時学術振興会COE特別研究員、一名は人文科学研究所非常勤研究員）を台湾中央研究院において、台湾における文字使用及び文字情報のデジタル処理の実態を調査、実習した（1週間）。

5 最終年度である2007年10月においては、2で行ってきたサマーセミナーと、3の人文情報学研究会の総括的なイベントとして、両者を合体させた「東アジア人文情報学セミナー2007」を開催した。

<http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/summerseminar2007.pdf>

6 人文研共同研究班

平成16年度以来、COEプロジェクトと密接にリンクする人文情報学に関する共同研究班を人文科学研究所に設置し、大学院生など若手研究者に研究発表及び討議への参加機会を提供した。それらの研究班は(1)「漢字情報学の構築」（班長：安岡孝一、平成16～19年度）、(2)「マークアップ—理論と実践」（班長：Wittern, C、平成16・17年度）であった。

7 オープンフォーラム「漢字文化の今」

初年度より毎年開催し、2回目からは京都新聞社との共催で行った。東アジア人文情報学の最前線の話や研究課題に関する研究発表及びシンポジウムを行い、それを通して東アジア人文情報学の目指すところについて、社会的に啓蒙することに務めた。

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は概ね達成された

(コメント)

拠点形成計画全体の目的達成度については、東アジアの文字に関する人文情報学的研究と漢字文献ナレッジベースの構築を二つの柱として、基礎研究・JISコードの改訂・唐代のデータベース構築などを意欲的に実施し、拠点としての目的を概ね達成したと評価できる。

人材育成面については、COE研究員採用、大学院教育、情報学的な技術実習に取り組み、学位取得者数の増加や教育の学問的な内容整備に努力を払った点は評価できる。

研究活動面については、漢字文化情報を情報化時代や国際化時代の新しいニーズに応えたものに作り変える作業を目標とした挑戦的な計画であり、着実に実施したことは評価できるが、本拠点で培った知見や方法を基礎に東アジア人文情報学を学問的に構築する作業は、まだ途上にあり、その点において課題が残されている。

補助事業終了後の持続的展開については、人文情報学の正規授業を開始して事業継続を図るとともに、平成20年4月に発足した京都大学デジタル・アーカイブに対しての技術支援とコンテンツの充実に貢献するなど、補助事業を持続的に展開する努力が払われており、今後に期待する。